秋の褒章・叙勲

11月2日に秋の褒章、3日に秋の叙勲の受章者がそれぞれ発表され、長年の功績などによって市内から7人が受章しました。

紅綬褒章

危険を顧みず人命救助

三池工業高校2年
笠間 春さん
大浜町、16歳

「全国最年少の受章だと聞いてびっくりしている」と目を輝かせる笠間さん。踏切内に倒れていた80代男性を危険を顧みず救出しました。

昨年5月25日の放課後、友人と3人で遊びに行く途中、JR鹿児島線の踏切内で身動きが取れなくなっている高齢男性を発見した笠間さんたち。線路を見ると遮断機はすでに下り、遠くから接近する列車が見えていたそうです。男性は倒れたときに足をけがしていて、意識がはっきりしない状態。列車停止ボタンを押しても間に合わないと判断した笠間さんたちは、迷わず踏切内に入り、男性と自転車を抱えて運び出しました。「助けなければという一心で踏切に飛び込んだ。列車が通過するぎりぎりのところだったので救出した後に足が震えた」と振り返ります。今回の受章に対して笠間さんは、「褒章をもらったからと慢心せず、受章者にふさわしい行動を心がけたい」と救出の際と同じく冷静に語ってくれました。

旭日双光章（保健衛生功労）

40年以上地域医療を支える

元柳川山門医師会長
金子 壽興さん
久々原、77歳

「諸先輩方もいらっしゃる中で私でいいのかという気持ち。家族や支えてくれた周囲の皆さんに感謝しています」と金子さんは受章を謙虚に受け止めています。

外科医だった父親の姿を見て、自然と医師を志した金子さん。昭和47年に久留米大学医学部を卒業後、同大学病院の勤務医として経験を積みました。昭和57年、父親が亡くなり、金子病院を継承。「昼も夜も診療し、目まぐるしい毎日だった」と当時を振り返ります。平成24年から6年間は、柳川山門医師会の会長として、医師や行政、関係機関との連携に奔走しました。医師として心がけていることは「まずは自分の健康を大切にすること。そして、職員の働きやすい環境づくり」と話す金子さん。最後に「医療は日進月歩で変わっている。常に最新の医療を勉強しながら、患者さんのニーズにあった診療を続けていきたい」と抱負を語ってくれました。

旭日双光章（地方自治功労）

1市2町の合併に尽力

元柳川市議会議員
江口 文博さん
藤吉、74歳

「三橋町を住みよい町にしたい」という思いで、昭和56年に三橋町議会議員に立候補した江口さん。以降、合併後の平成18年まで、通算で7期25年もの間、議員として1市2町の合併などに奔走しました。その間、議員として心がけたことは「公明正大。議会へ多くの市民の声を届けること」と話します。

合併前は三橋町議会議長をはじめ、総務常任委員会の委員長など要職を歴任しました。平成12年の合併特例法改正以降、全国的に市町村合併が推進。住民説明会では議員代表として合併の必要性を訴えました。平成17年には念願の1市2町の合併が成就。合併後は市議会副議長として、議会の円滑な運営と数多くの調整課題に取り組みます。「合併時は53人の議員の意見をまとめるのが大変だった」と当時を振り返ります。「受章は身に余る光栄。支えてくれた皆さんに感謝しています。これからも微力ながら市の発展に貢献できれば」と受章を喜びました。

瑞宝双光章（学校保健功労）

子どもの口内環境を守る

学校歯科医
相浦 洋治さん
旭町、80歳

昭和44年から両開小学校の学校歯科医に就任し、53年経った今も同校の歯科医を務める相浦さん。「長年取り組んできたことが認められたのでうれしい」と受章を喜びます。

学校医として児童に歯磨き指導や歯科検診をしていく中、児童ごとに歯並びが違うため、それぞれに歯磨きの指導が必要だと感じた相浦さん。そこで全校児童を対象にしていた検診や指導を、平成15年から指導は5年生のみに絞りました。理由は、5年生はそれまで乳歯が虫歯でも永久歯に生え変わって虫歯がなくなり、指導の意味を理解できる時期だからです。歯肉炎だった児童に磨き方をしっかり教えたところ、2週間後の検診で歯肉炎は治っていたそうです。これらの取り組みが評価され、平成24年に厚生労働大臣表彰を受賞。最後に「子どもの口内環境は親の行動に強く影響されるため、これからはその親への啓発にも力を入れたい」と今後の展望を語ってくれました。

瑞宝双光章（教育功労）

音楽教育の充実に寄与

元公立小学校長
大橋 鉄雄さん
垂見、70歳

「まさか自分が受章できるとは」と控えめに喜ぶ大橋さん。教員として37年間、専門とする音楽の力で子どもの個性を伸ばす教育に奮闘してきました。

大学卒業後、教員として福岡市や小郡市などの学校を経て、30代でブラジルの日本人学校に赴任した大橋さん。帰国後、47歳の若さで校長職に就きました。平成16年に51歳で豊原小学校長として柳川に赴任したときは、1市2町の合併協議の真っ最中でした。合併後に残す学校行事を決める協議の中で、白秋音楽まつりの終了案が浮上。白秋を次の世代へ継承する大切さを訴えた大橋さんの熱意が実を結び、現在も恒例行事として続いています。白秋の母校矢留小学校長を最後に退職後は、北原白秋生家・記念館の館長を7年間務めました。現在、柳川市とみやま市の全小中学校の校歌を1冊にまとめている大橋さん。「再編後も今の校歌が長く歌い継がれるようにしたい」と今も音楽教育にかける情熱は変わりません。

瑞宝単光章（児童福祉功労）

子どもと丁寧に向き合う

元二ツ河保育園保育士
彌永 惠美子さん
起田、74歳

「受章は園長先生をはじめ、諸先生や保護者など周りの皆さんのおかげ」と受章を喜ぶ彌永さん。昭和43年から江ノ浦保育園や二ツ河保育園で保育士として長年子どもと丁寧に向き合ってきました。

「昨今では保育の在り方や生活環境も変化し、保育の仕方を変える必要がある」と話す彌永さん。最近の子どもたちは、注意すると自分の意見を主張するので、なぜ注意したのかを丁寧に言い聞かせたそうです。また、後進の育成にも力を入れ、指導するときは、あまり口出しをせず、自ら行動を見せることで保育士としての在り方を示してきました。今年3月で二ツ河保育園を退職した彌永さん。「50年以上前から子供と接してきたから、子どもを寝かしつける速さには自信があるのよ」と笑います。最後に、「保育園は初めて子どもが親から離れる機会。保育士にはその不安を和らげてほしい」と後進に託す想いを語ってくれました。

瑞宝単光章（消防功労）

地域の安全を先頭で守る

元市消防団分団長
藤木 博幸さん
吉開、70歳

33年間、消防団員として市民の生命と財産を守ってきた藤木さん。そのうち20年間は、分団長として第18分団30人の陣頭指揮を執ってきました。

中学生の頃から消防団活動を間近で見ていた藤木さん。昭和54年に25歳で入団すると、訓練や実際の消火活動で知識や経験を積み上げていきました。出初式でポンプ操法の指揮者を任されたときは、風呂場でせりふを猛練習。「一緒に入っていた息子が先にせりふを覚えたよ」と笑いながら振り返ります。また、火災が鎮火せず昼から夕方まで休みなしで消火活動を続けたことや、放水場所が確保できず火災現場に隣接する家の2階から放水したことなど、苦労話は尽きません。最近では、団員のなり手不足を心配している藤木さん。「規律や俊敏な動きを学べるし、助け合える仲間も増える。良いことばかりだから、もう一度団員として入りたいくらいだよ」と最後に冗談を交えて消防団の魅力を語ってくれました。